

## 「赤松」の御縁がつながる郷土学習

三木一司

兵庫県最西端の自然豊かな上郡町は、人口約一万五千人。町の中心を流れる千種川とその支流に沿う様に、七年前までは七つの小学校があつたが、少子化による校区再編が平成二二年・二四年の二度にわたって行われ、三小学校区に統合された。

現在、上郡町教育委員会が管理する公立の学校園は中学校一・小学校三・幼稚園三であり、学校教育のシンボルフレーズに「夢をひらく教育」新たな夢の創造、全ての園児児童生徒に生きる力を」を掲げている。

さて、町内の学校では、古くより、歴史文化遺産を取り上げた郷土学習に取り組んでいる。校区再編前の旧校区において、それぞれの地区に伝わる伝説等はもちろん、神社仏閣や石造物、巨木、

城跡等を扱う社会科学習や総合的な学習の時間を通して、郷土の歴史や文化への理解を深め、愛着を醸成してきた。そのなかでも、国指定史跡白旗城跡をはじめ赤松氏関連遺跡に係る学習は、統廃合によつて今はなき旧赤松小学校はもとより、校区再編後も全ての学校で行われている。

ここからは、特に旧赤松小学校で展開されていいた、本町が誇る歴史文化を育む「赤松」を通した郷土学習について述べることとする。

学習内容は、主には、白旗城の伝説と歴史に関することと、その山城を築いた赤松円心に関する事である。旧赤松小学校区には、白旗城跡はもちろん、赤松の旧跡が多くあるため、児童が学習素材に出会う機会は十分であった。学校のすぐ隣には、赤松氏の菩提寺・法雲寺があつたほどであ

る。『雪村大和尚行道記』によると、元弘三（一三三三）年、円心は京に攻め入ったが、幕府の六波羅勢に敗れ、男山近くの淀川の河原で「この戦いに勝利を得るならば、一寺を建立して、神助に報いよう」と誓願をかけた結果、合戦に大勝を得たので、建武四（一三三七）年に雪村友梅を開山に迎えて法雲寺を建立したと伝えられている。

そして、郷土学習は、主に総合的な学習の時間を利用されて行われた。総合的な学習の時間と児童が自発的に横断的・総合的な課題学習を行う時間であり、平成一二年から教育課程に位置付けられた。体験学習や問題解決学習の重視、学校・家庭・地域の連携が掲げられており、教科などの枠をこえた横断的な学習も行われる。郷土学習の場合には、この時間と社会科学習がコラボレーションすることになる。

児童は、「赤松円心は、鎌倉末期から南北朝期にかけて活躍した武将であり、上郡町は円心の故郷である」という史実をこえて、地元の関係者からの聞き取りを経て、研究作品をまとめていく。六年生ともなれば、作品は力作となり、平成一七

年には「第四回 城の自由研究コンテスト」において文部科学大臣奨励賞を受賞した。その研究のリーダーであつた児童は、中学生になつても母校を訪れ、赤松円心に関する小学生向け授業の講師を務めた。

例として、平成二三年度の赤松小学校における高学年（五・六年生）総合的な学習の時間のカリキュラムは次の通りである。

◆五年生 テーマ「見つけよう、見つめよう、みんなのくらしと赤松の歴史」（一〇五時間）

うち二五時間が「地域学習」であり、題材は「赤松の歴史について調べ発表しよう」大鳥圭介について・法雲寺について」

◆六年生 テーマ「歴史へのカウンタダウン～夢は風に乗つて～」（一〇五時間）

うち二五時間が「地域学習」であり、題材は「赤松の歴史について調べ発表しよう」赤松円心について・白旗城について」「修学旅行のパンフレットを作ろう」円心と京都の寺との関係について」

前述から察していただけただろうが、これらの

学習の現場は、教室や校区内史跡だけに留まらない。地域で毎年一ヶ月二三日を開催される白旗城まつりの盛り上げに一役買うことはもちろん、特筆すべきは、修学旅行で赤松円心ゆかりの地を巡る行程が組まれていたのである。スタートは、平成一四年のことであった。当時の担当教員が下見を重ね、京都での研修場所を、久昌院・大徳寺・相国寺・鹿苑寺（金閣）とした。どこも、大変に赤松氏と縁が深い。

まず、建仁寺久昌院。赤松円心が建立した法雲寺（上郡町赤松）の開山として招かれた雪村友梅が建仁寺の住持として就任しており、建仁寺境内の西に位置する塔頭・久昌院には、赤松円心と雪村友梅の墓所がある。児童らは二人の墓に、上郡町赤松から持参したしき



みと、白旗城跡の側を流れる千種川の水を供え、先祖の墓参りしながら手を合わせる。普段は非公開の厳かな塔頭内での特別のお参りである。次に大徳寺を訪れる。赤松円心の帰依を受けた宗峰妙超が建てた小堂が起源とされている禅宗寺院である。方丈にて、狩野探幽筆の襖絵に囲まれながら、赤松円心の御位牌と対面した後、前庭の枯山水と唐門を鑑賞する。そして山門へ。





二階部分「金毛閣」にあがり、利休居士の木像や長谷川等伯の天井画に圧倒される。大徳寺は通常、一般公開されていないため、特別に配慮された拝観である。

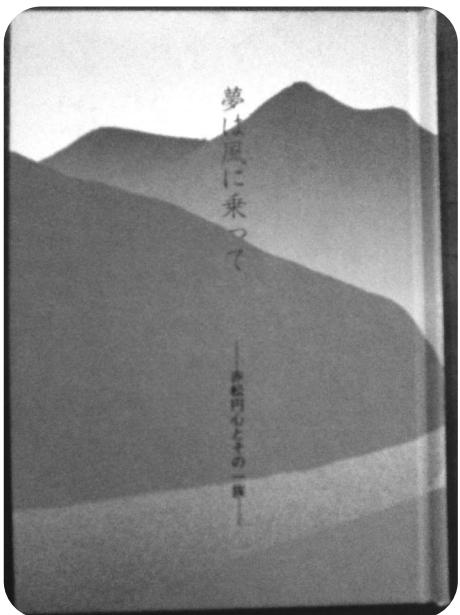
そして、足利氏菩提寺である相国寺。ここまで三つの寺院を、班別行動での自主研修とした。

続いて、鹿苑寺（金閣）。建立した足利義満が幼少（春王丸）の頃、幕政をめぐる深刻な争いから逃れるため、建仁寺から白旗城へ避難をし、円心の三男赤松則祐が養育をしたと伝わる。春王丸は、白旗城で奏でられた赤松囃子が大変気に入つており、将軍になつた後も、都で、そのお囃子を奏でたということである。そういった縁で、特別拝観に配慮いただき、一般観光客とは反対側のル

トを、寺務所の職員の方の説明を受けながら進む。足利義満の求めに応じ、かつての有力武将が競つて献上した言われる鏡湖池に配された名石のうち、切り立つ「赤松石」がひときわ凜々しく見える。



ところで、修学旅行前には事前学習を行う。例えれば、児童らは『夢は風に乗つて』を通読する。上郡在住の西崎治世さんが著者であるこの物語は、分かりやすい柔らかい文章で、円心とその一族について書かれており、児童をたやすく鎌倉・室町時代にいざなつてくれる。西崎さんが巻頭に書か



れている「赤松円心をはじめ、赤松家の人々は武将として優れていたことは勿論、高い知性を持つ人間性豊かな人々でした。円心の心をたどりつつ、一人でも多くの人に、赤松家の人々のことを知つていただき、親しんでほしいという願いでこの物語をしたたけました」という言葉どおり、児童らは赤松家の人々の人となりに親しみを覚える。また、修学旅行のパンフレットを作成するという課題に取り組む過程でも、円心ゆかりの歴史文化を整理することができる。修学旅行本番を迎える頃には、すっかり、赤松氏一族が児童らにとつて身近な郷土の偉人となつてている。

旧赤松小学校は平成二三年度末に閉校となり、翌年度より上郡小学校と統合となつたが、この特徴的な修学旅行は、校区再編後も主要部分が継続された。以

前は新行程を調整する折りに、各寺院とも、特別拝観に難色を示されたが、関係者様方が「赤松」の御縁を大切にして下さつたことにより、門戸が開いた。感謝の限りである。そのうえ、平成二七年からは、その他の町内小学校（山野里小学校・高田小学校）においても、鹿苑寺（金閣）の特別拝観をさせていただけることになり、町内全域で「赤松」の御縁を実感し、郷土学習にもますます熱が入つてゐるところである。

以上が、「赤松」を通した郷土学習の一端である。もちろん、統合後の上郡小学校においても、旧赤松小学校からの伝統を引継ぎ、赤松円心に関する郷土学習は、もう一人の郷土の偉人である大鳥圭介（幕末から明治にかけての英傑）の学習とともに展開されている。また、PTA活動の一環である親子ふれあい学習においても、白旗城登山に挑戦している。

児童生徒を導くためには、教員の研修も重要である。上郡町主催の初任者研修では、赤松円心・大鳥圭介についての学習を欠かさない。

現在本町では、落ちない城・白旗城のPRとして、もとより町のマスコットキャラクターであつた「円心くん」にさうにスポットをあてたプロジェクトを開催している。

「播磨の歴史は赤松に始まる！歴史の里・赤松にある落ちない城・白旗城を訪ね、難攻不落の落ちない城にあやかり、合格・成功・成就を願おう！」というものである。さつそく、子ども向け人権講座に登録している上郡小学校の児童らが白旗山に登り、絵馬に願いを書き入れた。



歴史と未来が出会う町・上郡。悠久のときを刻むような清流・千種川の流れとともに、歴史文化の漂う優美な風景は我らが誇りである。ここに育つ子どもたちが、「赤松」の御縁のもと、

地域に愛着と誇りをもてる学校教育を、今後も展開していきたい。